

◎2020年6月

◎第1943回 定期公演 Bプログラム

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）の生誕250周年を祝するにあたり、後期の傑作《ミサ・ソレムニス》は格好の選択肢である。カトリックの厳格な伝統を強く意識しつつも、ロマン主義的な芸術家の個性が、典礼の枠組みを遥かに超越した孤高の境地を切り拓いている。

■ベートーヴェン

■ミサ・ソレムニス ニ長調 作品123（約74分）

「荘厳ミサ」とも訳される「ミサ・ソレムニス」の語は、もともと一般名詞で「使徒書簡と福音書以外の部分がすべて歌われるミサ」というくらいの意味である。それが「ミサ・ソレムニス」と言えば、国際的にもベートーヴェンの作品であると理解されるほど、この作品は大きな存在感を歴史に残してきた。

ベートーヴェンは、《ミサ・ソレムニス》の創作に先立つ1818年の日記に「真の教会音楽を書くためには、修道士たちのすべての教会歌などに目を通し、もっとも正確な翻訳における言葉の区切り方や、すべての古カトリック派の詩篇唱や教会歌全般の完全な韻律法を調べなければならない」と記している。彼は、同時代の教会が持っていた権力を嫌っており、表面的に伝統をなぞるようなことは考えなかった。この言葉からは、知力を尽くしてキリスト教とキリスト教音楽の本質に対峙（たいじ）しようとする強い意志が伝わってくる。

初演を経たのちの1824年9月16日には、友人に宛てて「この大ミサ曲を作曲した際の主たる目的は、歌っている人たちにも聴いている人たちにも宗教的な感情を呼び覚まし、それが持続するものとなるようにすることだった」と述べている。この楽曲が実際の典礼で使用可能か否かという議論はさておき、ベートーヴェンが創造しようとしたのは教会のための音楽ではなく、信仰のための音楽だったと言って良いだろう。

創作の直接の契機となったのは、時のオーストリア皇帝フランツ1世の末弟で、ベートーヴェンの最大のパトロンにして、「唯一」とも言われる作曲の弟子であったルドルフ大公のオルミュツ（現チェコのオロモウツ）大司教への就任であった。創作への明確な意図が

最初に裏付けられるのは 1819 年 3 月で、就任式典は翌年 3 月 9 日に行われたが、その時点では創作はクレドの途中までしか進んでいなかった。その後には他の作品を優先的に手掛けたことなどもあり、大きな中断も挟んだが、遅くとも 1823 年 1 月には総譜の基本的な部分は仕上がっていたと考えられる。

「通常文」と呼ばれるキリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、アニュス・デイの 5 つの部分が、それぞれ楽章のようなまとまりとして創作されている。〈キリエ〉は、テキスト自体の 3 部構成に従い、楽曲も明瞭な 3 部形式である。〈グロリア〉と〈クレド〉は言葉の量が多く、創作が難しい。この楽曲の大きな特徴のひとつが、単語の内容を極端なまでに表出し、それを通じて対比を生み出すことにあるが、〈グロリア〉冒頭の「いと高きところ」と「地」との対比は典型的である。〈クレド〉では「天よりくだり、人となり、苦しみを受け、葬られ、よみがえり、天に昇り」という 6 つの事柄が次々に描写されるが、ここでも内容に即して音楽が次々に変化してゆく。〈サンクトゥス〉は、オルガンの即興演奏を思わせるような前奏曲を挟んで大きく 2 つに分けられるが、前半だけでも 3 つに区切れており、「天と地は主の栄光に満ちて」以下の部分は、その内容からも「天上の音楽」と解することができよう。前奏曲のあとには、天から下りくるようなヴァイオリン独奏が強い印象を残す。〈アニュス・デイ〉では「われらに安らぎを与えたまえ」という最後の 3 つの単語に長大な時間が割り当てられるが、その音楽の流れには 2 度の中断がある。これは平和の危機とも考えられ、危機は乗り越えられたかにも聴こえるが、圧倒的な終曲とはならない。長い革命戦争の時代を生きた作曲者自身の平和への想いを感じ取ることでもできよう。

作曲年代：1819 年 4 月～1823 年 1 月

初演：1824 年 4 月 7 日、サンクトペテルブルク、1824 年 5 月 7 日、ベートーヴェンの自益演奏会でキリエ、クレド、アニュス・デイのウィーン初演（ケルントナートーア劇場にてミヒャエル・ウムラウフ指揮で）

（沼口 隆）